

## 「仏花」

ひのき  
 松や檜などを真にして、四季折々の木に咲く花、草花などをとり交ぜて挿します。おおよそ、どんな花でもよいとされていますが、棘とげのある木の花、つるに咲く花は仏花には用いません。



造花は用いず、生花を用いましょう。

大谷派の仏花は、池ノ坊流の立花様式を基本として、現在のかたちに発達したといわれています。

※イラストはお内仏用仏花の一例です。



真宗大谷派  
 名古屋別院

<http://www.ohigashi.net/>

- 〒 460-0016
- 名 古屋市中区橋2-8-55
- ☎ 052-321-9201
- ☎ 052-321-3184



このリーフレットは、環境に配慮したインク、用紙を使用し作成しました。

09.02.  
 10,000

法の事  
 ころ

真実の教へに出であ遇う

5

# 法事のころ

廣瀬 惺

「法事」という言葉そのものは、「仏法の事業」という意味で、仏法に関する行事全般をさします。しかし一般には、身近な亡くなられた方への思いでつとめられる仏事についていわれます。そして、その「法事」は、亡き人への追善供養のためであると受けとられています。しかし、ここに思い浮かびますが、親鸞聖人の「親鸞は父母の孝養（供養のこと）のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。」というお言葉です。このお言葉には、法事を追善供養の思いでつとめようとする私たちのあり方を、問い返す響きを感じられます。一体、聖人はなぜこのようなことをおっしゃっているのでしょうか。

身近な亡き人を思う心は、人として自然な心です。しかし、追善供養となったとき、それは、私の親のため、あるいは私の先祖のため等として、無数の命と共にある広いかかわりの世界を閉ざすことになっていくのではないのでしょうか。そして、それはさらに、身近な人と他の人とを分けへだてをし差別する心にもつながっていくのではないのでしょうか。さらにはまた、健康と病気、生と死等を分別して迷いの



世界を作っていく、そのような心にもつながっていくのではないのでしょうか。聖人のこのお言葉は、私たちの迷いのもとになっている心の方向を見定められたところからのものに違いありません。

そのような聖人のお心をいただきますとき、法事を、追善供養のためとしてではなく、自分を中心にして人や物事を選び分けて、迷いの世界を生み出し続けている私たちのあり方を照らしだし、そこに真実の生き方を開いてくださる仏様の教えを聞く場として受けとめていかなければならないのではないのでしょうか。そして、そのようなこととして法事がただかれますとき、法事は、亡き人が私たちに与えてくださった、尊い仏法聴聞の場になるのではないのでしょうか。

(ひろせ しずか 同朋大学教授)